

東京講演会を開催

10月5日に東京の有楽町朝日ホールにおいて、「第11回東京講演会」を開催しました。この東京講演会は、奈良文化財研究所の日頃の活動や調査・研究成果を、広く東日本の方々に紹介することを目的として2010年から始めた企画です。

昨年は「藤原から平城へ－平城遷都の謎を解く」と題して、天武・持統天皇が国家の威信をかけて造営した律令国家建設のシンボルであった藤原京がわずか16年の短命に終わった理由やなぜ平城の地に遷都したのかといった謎に迫りました。

今年はそれに引き続き、「奈良の都、平城宮の謎を探る」と題して遷都後の平城宮の謎に迫ることとし、奈文研の6名の研究員が「平城の地はどうして選ばれたか?」、「平城宮のモデルは唐の都長安城か?」、「平城宮はどのように作られたのか?」、「平城宮の東院とはどういう施設か?」、「施釉瓦塼・陶器の出土は何を示すか?」、「平城宮で即位した天皇の大嘗宮は?」といった様々な観点から最新の調査研究成果を紹介しました。その後、6名の研究員にコーディネーターをくわえてのパネルディスカッションがおこなわれ、平城宮跡の今後の調査研究課題を論議的とし、「まだまだある平城宮の謎」の解明に向けた各研究員の意気込みが熱く語られました。

当日は464名の方の来場があり、10時から16時にわたる長丁場の講演会でしたが、メモをとりながら熱心に聴き入る方も多く見受けられ、大盛況のうちに終了しました。なお、東京講演会には、毎回多数の方にご来場をいただいております。あらためて御礼申し上げます。 (研究支援推進部 貴村 好隆)



会場の様子

赤米献上隊の来訪

10月10日、兵庫県養父市八鹿小学校の六年生児童が自分たちで育てた赤米を研究所に持ってきてくれました。1963年の平城宮跡の発掘調査で但馬国養父郡小佐地域から赤米五斗を平城宮に納めたことを示す木簡が出土したことに因むものです。兵庫県養父郡八鹿町小佐地区では1980年から赤米の栽培を始め、地元の小学校の児童が赤米を育て奈良の都に献上するというイベントを1990年から一時中断を含めて継続的におこなってきました。2012年の小学校統合後は養父市立八鹿小学校が引き継ぎ、地元で田植え・稲刈り・感謝祭・わら細工づくり等赤米づくりの体験活動をおこない、締めくくりに奈良の都に赤米を献上するというものです。

赤米献上隊は平城宮跡資料館にバスで到着し、そこから俵を担いで資料館へ持ち込み、贈呈式をおこないました。校長先生挨拶、奈文研代表挨拶、児童からの挨拶があり、児童からは赤米1升と当時の木簡を大きく拡大したものが届けられ、役人に扮する研究員が検品の後、領収証にあたる返抄木簡を手渡しました。養父郡出身の采女たちに扮した職員も参加しました。馬場史料研究室長の講話の中で、長さ約28cmの出土した実物の木簡を見た児童たちは「木簡は意外と小さかった」等の感想を語ってくれました。その後、児童たちは平城宮跡資料館を見学し、平城宮跡を後にしました。

出土遺物に関わる地域間交流は平城宮跡の活用にヒントを与えてくれたと実感しました。

10月17日付けの「なぶんけんブログ」に写真とスライドショーを掲載していますので、こちらもご覧ください。 (文化遺産部 内田 和伸)



赤米贈呈式の様子